

横田英史の 書籍紹介コーナー



基盤モデルとロボットの融合 ～マルチモーダルAIでロボットは どう変わるのか～

河原塚健人、松嶋達也
講談社 3,630円(税込)

生成AIのロボットへの適用手法を解説した書。事例は研究やシミュレーションのレベルだが、生産現場や生活空間におけるロボット利用の将来像を垣間見ることができる。フィジカルAIへの関心が高まるなか時宜に合った書だ。

中核はマルチモーダルに対応し、テキスト、画像、音声、動画、センサーデータなどを扱える汎用性の高い「基盤モデル」である。基盤モデルによってロボットの認識や制御の仕組みが大きく変わる。大規模言語モデル(LLM)や視覚言語モデル(VLM)、音声言語モデル(ALM)といったモデル同士が「言語」を介して議論し、情報を共有することで様々なアプリケーションへの対応が可能になる。

LLMは人間の常識的な知識をある程度まで包含している。この前提知識を活用することで、ロボットは認識や計画といったタスクを自律的にこなせるようになる。

脳・心・人工知能(増補版) ～数理で脳を解き明かす～

甘利俊一
講談社ブルーバックス 1,210円(税込)

生成AIや深層学習、機械学習の興隆に大きな貢献をした数理工学者 甘利俊一の手による人工知能の啓蒙書。最近の生成AIブームを踏まえて、新たに3つ

の章を追加した増補版である(初版は2016年)。追加した3章では「現代AIの基本技術～深層回路網と生成AI」「心と意識～AIは心を持つか」「AI時代の文明と社会」と、時宜に合ったテーマを取り上げる。

筆者は、2024年のノーベル物理学賞を受賞したジェフリー・ヒントンやジョン・ホップフィールドに先んじて、誤差逆伝播法と連想記憶モデルを提唱した。AI興隆の源流と再評価されている。本書で筆者は、「人工知能と神経回路網の理論研究の源流は日本にもあり、その成果が国際的に活かされてAI時代を迎えた」と述べる一方で、日本の研究が国際的には十分に認知されていないことに不満を漏らす。

勝負師 孫正義の冒険(上)(下)

ライオネル・バーバー、村井浩紀・訳
日経BP 日本経済新聞出版
上下巻とも1,980(税込)

異形のビジネスマン「孫正義」の深層に迫ったノンフィクション。その行動パターンと行動原理を探る。筆者は、21世紀最強の大立者と持ち上げる一方で、孫の常識外れのビジネス手法を「うさんくささを撒き散らし、危ない橋をわたる」と批判的に分析する。

上巻では孫が大化けする前の時代を紹介する。ソフト卸売会社であるソフトバンク設立、米国企業買収(ジフ・デイビス出版部門、展示会コムテックス)、ヤフーやアリババへの投資などである。

下巻は、中国アリババや英ARMへの

巨額投資の大成功、ボーダフォン買収による携帯事業参入とiPhoneの国内独占販売、ウィークス投資の大失敗、ビジョンファンドの栄光と苦境、OpenAIなどと組んだスターゲートプロジェクト、後継者争いに至るまで盛り沢山。意思決定の難しい状況の連続で、タイトルの「勝負師」の面目躍如だ。

創造的破壊の力 ～資本主義を改革する22世紀の国富論～

フィリップ・アギヨン、セリーヌ・アントニン、
サイモン・ブネル、村井章子・訳
東洋経済新報社 4,620円(税込)

2025年ノーベル経済学賞受賞者の書。イノベーションをテコにしながら持続的で富の偏在のない経済成長を成し遂げるために、税制や教育制度といった政治的施策で資本主義国家が選ぶべき道を提示する。広い視野から展開する議論はバランスが良く読み応えがある。

フランスの教育機関「コレージュ・ド・フランス」における講義をもとにした書で、400ページを超える大著だが読む価値がある。余白の大きなレイアウトなので意外に早く読み終えることができる。イノベーションについて関心のある方にお薦めだ。

シュンペーターの経済成長理論を抛り所に、5つの経済的謎を解明する。工業からサービス産業への移行や、キャッチアップ経済からイノベーション経済への移行がなぜ起こるかについても言及する。実証研究の客観的・定量的データを用いて論じており説得力に富む。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マグロウヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現日経クロステック)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役役に就任。2018年3月退任。2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、2020年4月(株)DXパートナーズ アドバイザリーパートナー、2024年3月(株)観瀾舎を設立 代表取締役社長、現在に至る。

記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組込み制御、知的財産権、環境問題など。

*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係がありません。

